



パリの憂鬱

藤原絵理子

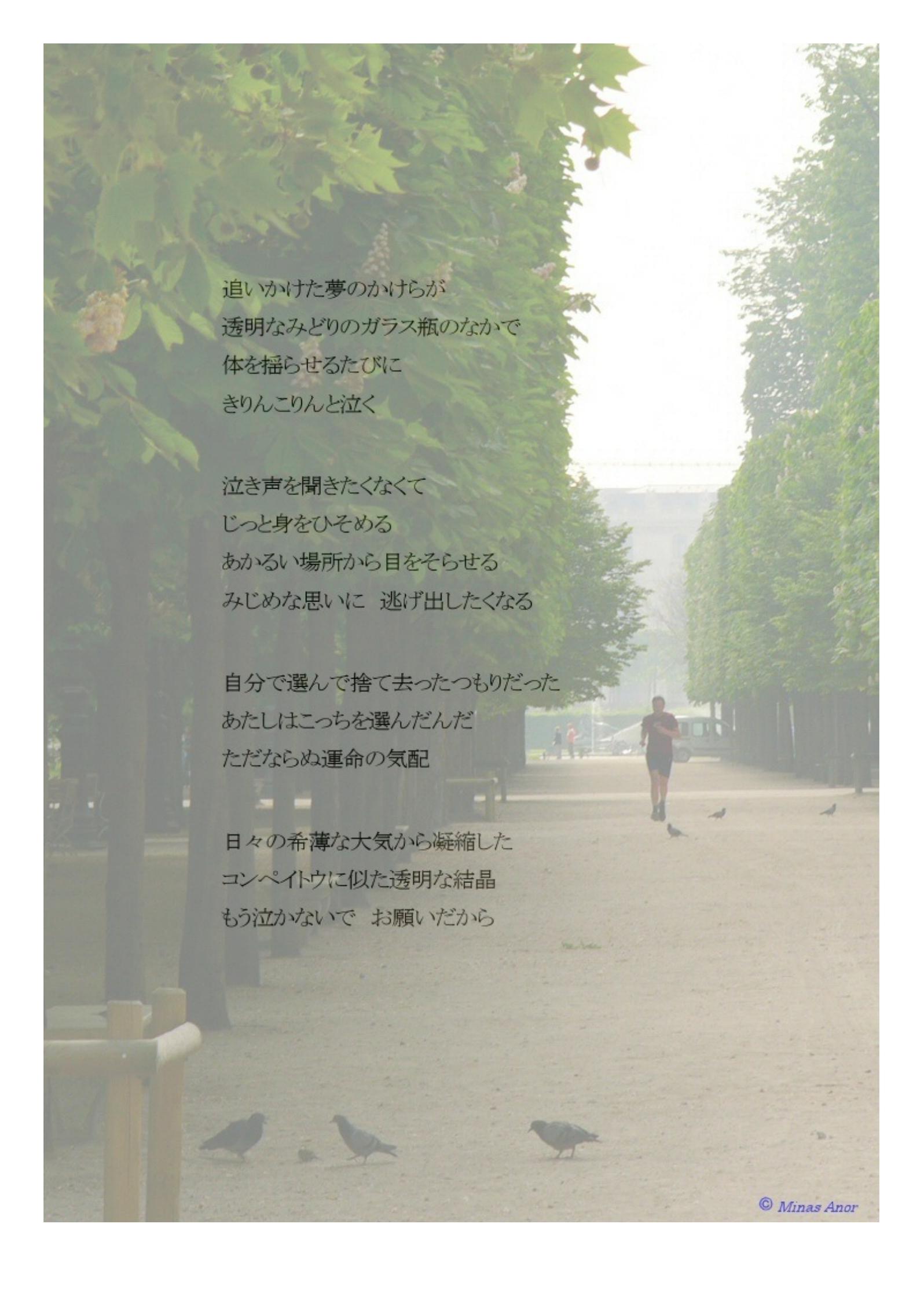
詩を読んでくださったみなさんに感謝を

そして、これから読んでくれるみなさんに

捧げます♪





A photograph of a tree-lined path. On the left, there are large green trees with some white flowers. A person in a dark shirt and shorts is running away from the camera on the path. In the foreground, several pigeons are on the ground. The background shows a building and a bridge under a bright sky.

追いかけた夢のかけらが  
透明なみどりのガラス瓶のなかで  
体を揺らせるたびに  
きりんこりと泣く

泣き声を聞きたくなくて  
じっと身をひそめる  
あかるい場所から目をそらせる  
みじめな思いに 逃げ出したくなる

自分で選んで捨て去ったつもりだった  
あたしはこっちを選んだんだ  
ただならぬ運命の気配

日々の希薄な大気から凝縮した  
コンペイトウに似た透明な結晶  
もう泣かないで お願いだから



白ワインのグラスに 逆さまに  
10月の雨に濡れた ムフタール通りが  
もの憂げな 縮れ毛のきみの 髪の色と  
愛した少年の 産毛の耀きが 悲しく重なる

こちらの世界に 繋ぎ止める すべてから  
ありえない景色に憧れて 逃げ去る  
秋の日のヴィオロンは 湿っている  
秋の日のピストルは ほの暖かい きみの体温で

あたしは マロニエの実を拾って  
本を抱えた カルチェ・ラタン of 彼女に  
恋をする 壁の向こうの世界を 空想する

巴里は沈黙している 無数の骸骨が黙り込む  
流れ去る川の 水に溶け込んだ 悲しみと  
吐き気のする汚物が 時間を刻んでいる

## What you said

---

べつのことを考えながら  
言うときのセリフは  
「きみだけを愛してるよ」

このあいだ  
そのセリフを口にしたとき  
電話のむこうにあやしい気配

サファイアのピアス  
あなたは気付かない  
髪の色が少しかわったこと

トロピカルブルーに照らされた  
棚のボトルを眺めながら  
やけに時計を気にしてる

いじわるなあたしは  
知らんふりして  
とりとめのない話をする

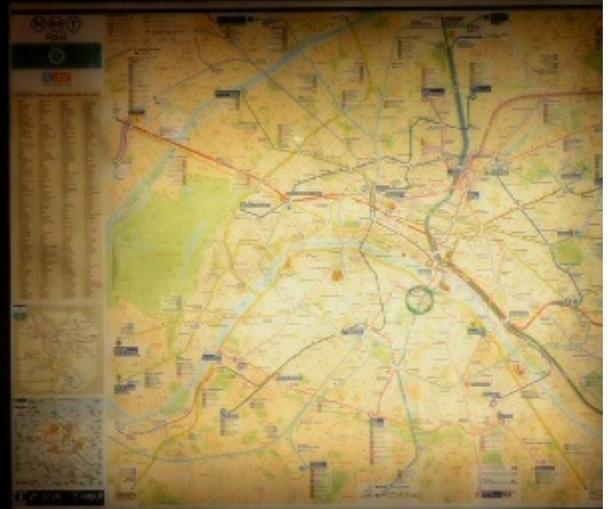
銀のチョーカー  
あなたのものであるしるし  
カクテルグラスにきらめく

どうしても  
言ってほしいことがある  
喉まで出かかっている

むやみにタバコをふかして  
気のないあいづちを打って  
水槽のクラゲを眺めるのは楽しい？

もう帰ってもいいよ  
もうあたしも帰りたくなったから  
キスのかわりになんて言ってくれる？

Cluny  
La Sorbonne





丘をのぼる石だたみの  
坂道でうずくまっている  
ベレーをのせたあたしの夢  
ただの酔っぱらい  
指にこびりついているのは  
絵の具じゃない  
細かい灰色の砂ぼこり…  
指の間から零れおちた砂の残骸

こんなところをさまよっていたんだ  
あたしは別れを告げたとき  
ことば巧みにきみを欺いて  
茶色いガラスの小瓶に閉じこめた

見えないように  
あたしが二度と魅せられないように  
あたしが二度とおぼれないように…

大きな枯葉を風がつまみあげて  
ガサガサみっともない音をたてる  
石だたみの上を引きずって降りていく  
突然 あたしは気づくんだ  
しまっておいた茶色い小瓶の軽さ  
すっかり忘れていた間に  
軽くなってしまったきみのことに

いっしょに帰ろう  
あたしはもうだいじょうぶだよ  
きみの肩に手を置いた一瞬  
銀色にきらめく青い海の残像がよぎる  
波にあわ立つ潮の香りさえよみがえる  
あたしを見上げるきみの目が  
ずっとさみしかったんだよ と言う

ゆらゆら揺れはじめるきみのベレー  
あたしは微笑みながら涙を流す  
ちいさい弟みたいにきみを抱きしめる  
むかし夢中で読んだ本の匂いとする



なんか そっけないなあ  
いま  
なに考えてるの？  
あたしのこと…  
じゃないよね

「ねえねえ  
こんなふうに  
まとわりついたら  
うざったいよね」  
ってたずねたら  
それまで  
「うーっ」って顔してたあなたが  
メガネをはずしながら  
本から目をあげて  
「散歩でも行く？」  
と たずねかえす

いえいえ  
あたしは お散歩に  
行きたいんじゃない  
いっしょにいるときくらい  
かまってほしいなあー  
と 思ってるだけで  
それだけなんだけど  
それって  
あなたにとって  
おもいカンジ…  
なのかしら？

Musée MARMOTTAN







もしも  
今朝飲んだのが  
カフェオレじゃなくて  
ミルクティーだったら  
今 あたしはどうなってたかな

気が遠くなるほど  
たくさんの分かれ道で  
そのたびに立ち止まって  
迷いながら選んできた  
結び目だらけのロープが残る

過去の方角を振りかえれば  
幻の道が1つに集まる場所が  
はるか彼方にかすんで  
かすかな胸の痛みを覚える  
まだその場所が見える

もしも  
好きになった人が  
あなたじゃなくて  
別の誰かだったら  
今 あたしはどうなってただろう

冷静に  
振りかえったりできる  
それが  
しあわせなのかもしれない  
たくさんの「もしも」に微笑みながら

せつなさが胸を刺すのは  
まだほんの少しだけだから  
結び目の連なりに  
いつか後悔しないように  
今日の「もしも」と話さなきゃ

誰かが仕組んだわけじゃない  
あたしだけの  
「もしも」だから  
あたしだけが  
話せる相手なんだから





しあわせな瞬間を  
こっそり切りとって  
あわいブルーのアルバムに  
貼りつけてほっとする

あとから眺めるわけでもないのに  
夢中でレイアウトを考えたりして  
だれに見せるわけでもないのに  
書きこむコメントで悩んだり

しあわせな瞬間のつらなりは  
はだしの足に食い込む小石を忘れさせる  
まっしろになった風景への彩色

くりかえしくりかえし唱える呪文  
いたずらに厚くなっていくだけの  
あわいブルーのアルバム

**Peace**

---



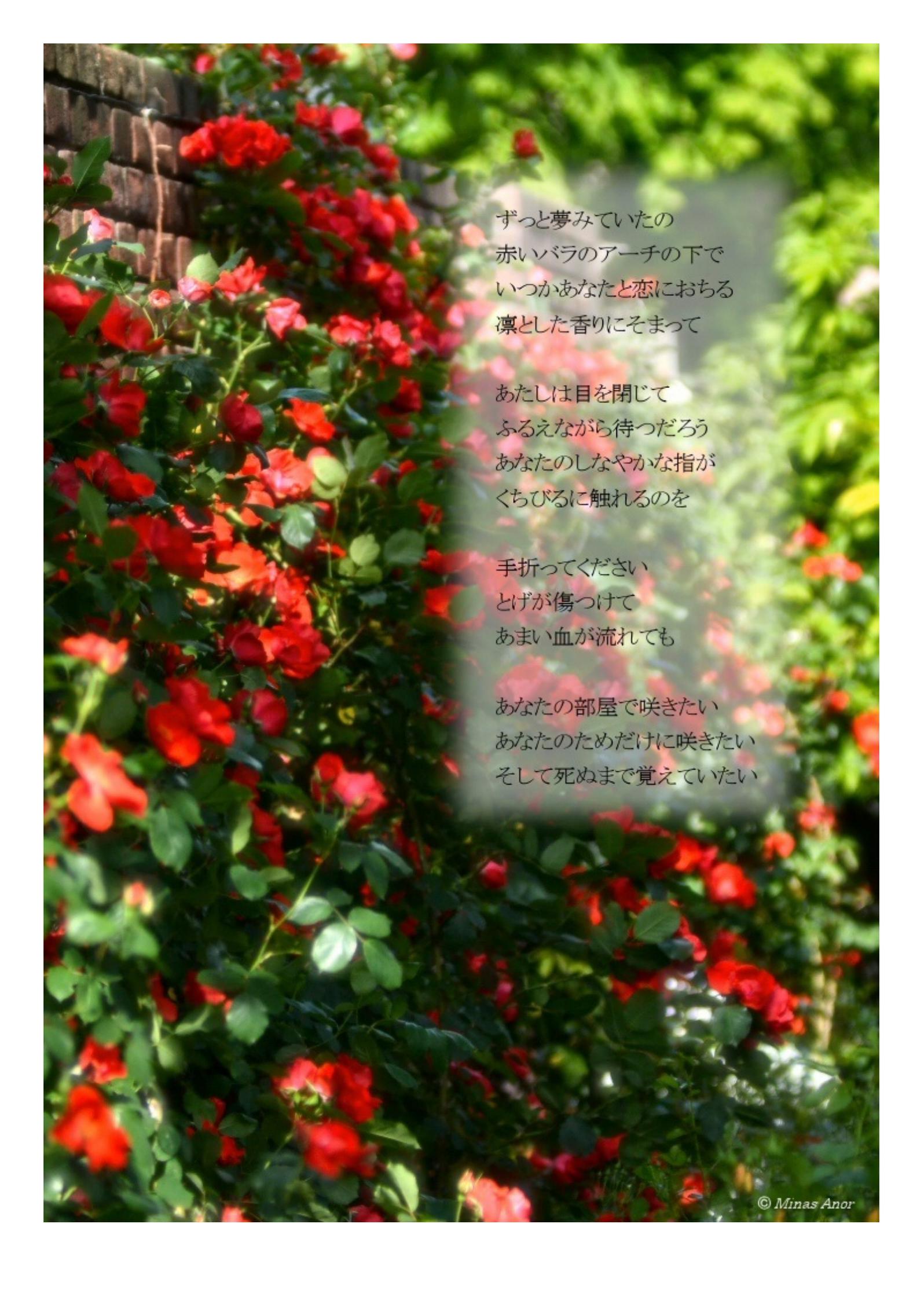
夕焼けが一滴  
グラスのソーダ水に落ちる  
オレンジ色の泡が 壊れて跳ねて  
テーブルに無数の 黒い点を残した

その夜  
洋燈の芯は燃え尽きた  
寒りのない会話は 肌に  
染み付く灯油の 匂いを残した

あなたが話している間 あたしは  
回し車の栗鼠を 思い浮かべていた  
シーシュポスの岩が 崩れる瞬間を

どこからか音符の群れが 流れた  
あたしは物語 けっして終わることのない  
あなたは夕焼け 何度も繰り返して





ずっと夢みていたの  
赤いバラのアーチの下で  
いつかあなたと恋におちる  
凜とした香りにそまって

あたしは目を閉じて  
ふるえながら待つだろう  
あなたのしなやかな指が  
くちびるに触れるのを

手折ってください  
とげが傷つけて  
あまい血が流れても

あなたの部屋で咲きたい  
あなたのためだけに咲きたい  
そして死ぬまで覚えていたい

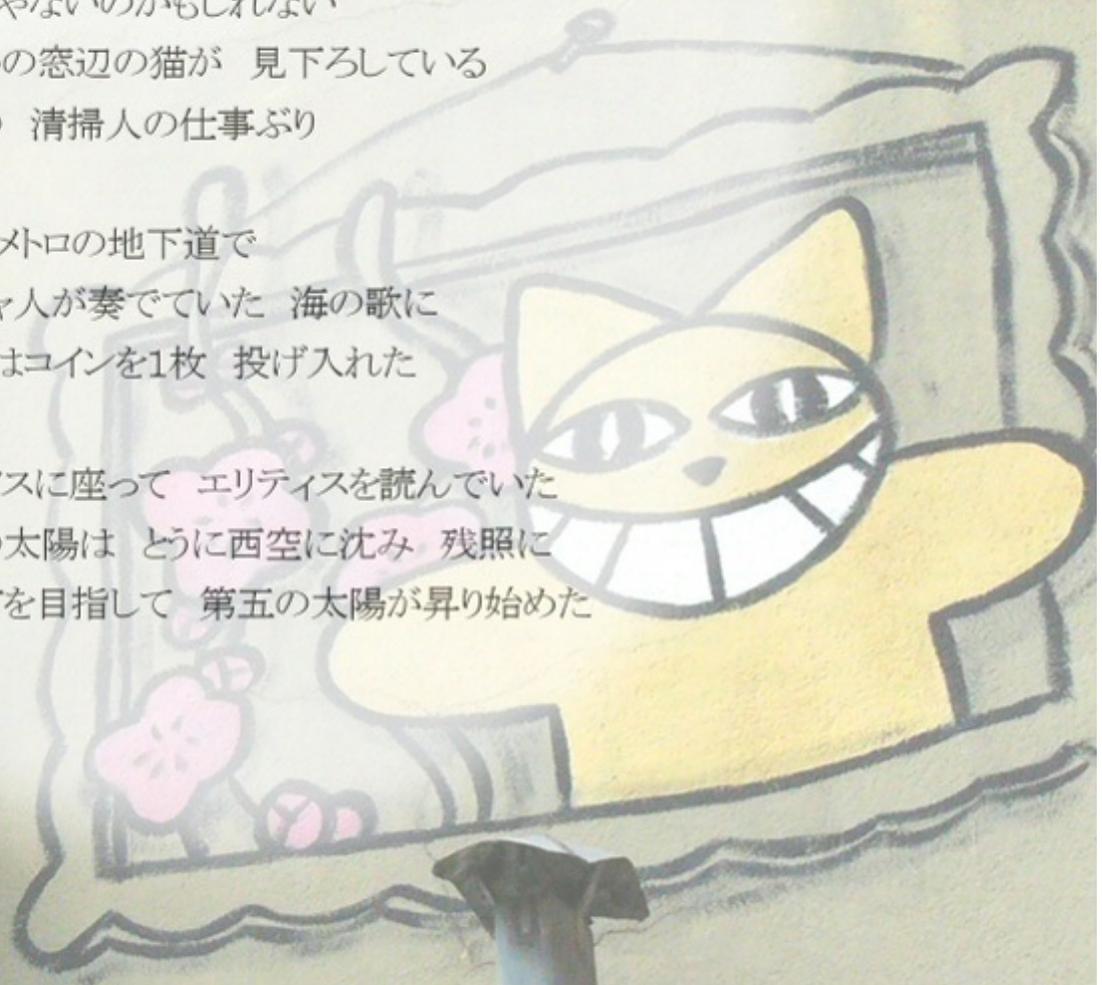


午後の篠懸が揺れる 川からの風に  
猫のスプレーペイントがある 学校の壁  
「シノワーズ？」 「ン」  
うんざりする質問と返答 川沿いの古書店

思ったほど この町が  
嫌いじゃないのかもしれない  
向かいの窓辺の猫が 見下ろしている  
毎朝の 清掃人の仕事ぶり

昨日 メトロの地下道で  
ギリシャ人が奏でていた 海の歌に  
あたしはコインを1枚 投げ入れた

クノッソスに座って エリティスを読んでいた  
第一の太陽は とうに西空に沈み 残照に  
燕は町を目指して 第五の太陽が昇り始めた







まるくなった猫の眼 チャイナドレスの黒い髪  
いつものことのように 振舞う  
カフェは満員だったけど 手を上げると  
席を作ってくれる シェルブールから来たギャルソン

もう 彼の故郷に行ってしまうような気分  
赤のワインは ますます赤く 凄絶に  
街行く傘は 笑いさざめいたり 急いだり  
あたしの隣に あなたがいないだけ

誰かがピアノを弾いている  
しなやかな指が 滑るように  
夜の雨に 街路樹が濡れる 街灯が濡れる

追憶の向こうに 朝のゆで卵を置いてみる  
シェルブールの彼が 不思議そうに見下ろす  
あなたの傘に入りたい 巴里の乾いた雨



街灯は 歌いもせずに  
夜のムフタール通りへ  
きみは行くべきじゃない  
と 投げ捨てるように言う

ホテルの玄関で  
前脚にギプスをした猫が  
にやっ と笑った気がした  
ちょっと不敵な眼

ヴェルレーヌの死んだ家は  
洒落たレストランになって  
口紅の色とサッカーと株の話しかしない  
間抜けなパリジャンに占領されていた

冷たいよね 雨が  
愛って やわらかいのかな？  
高慢な石畳が  
ネオンを反射して光った

サンエチエンヌ教会の前で  
あたしはマロニエの実を拾う  
ぼろ雑巾のような子猫を拾う  
ヴェルレーヌの幻影を見る

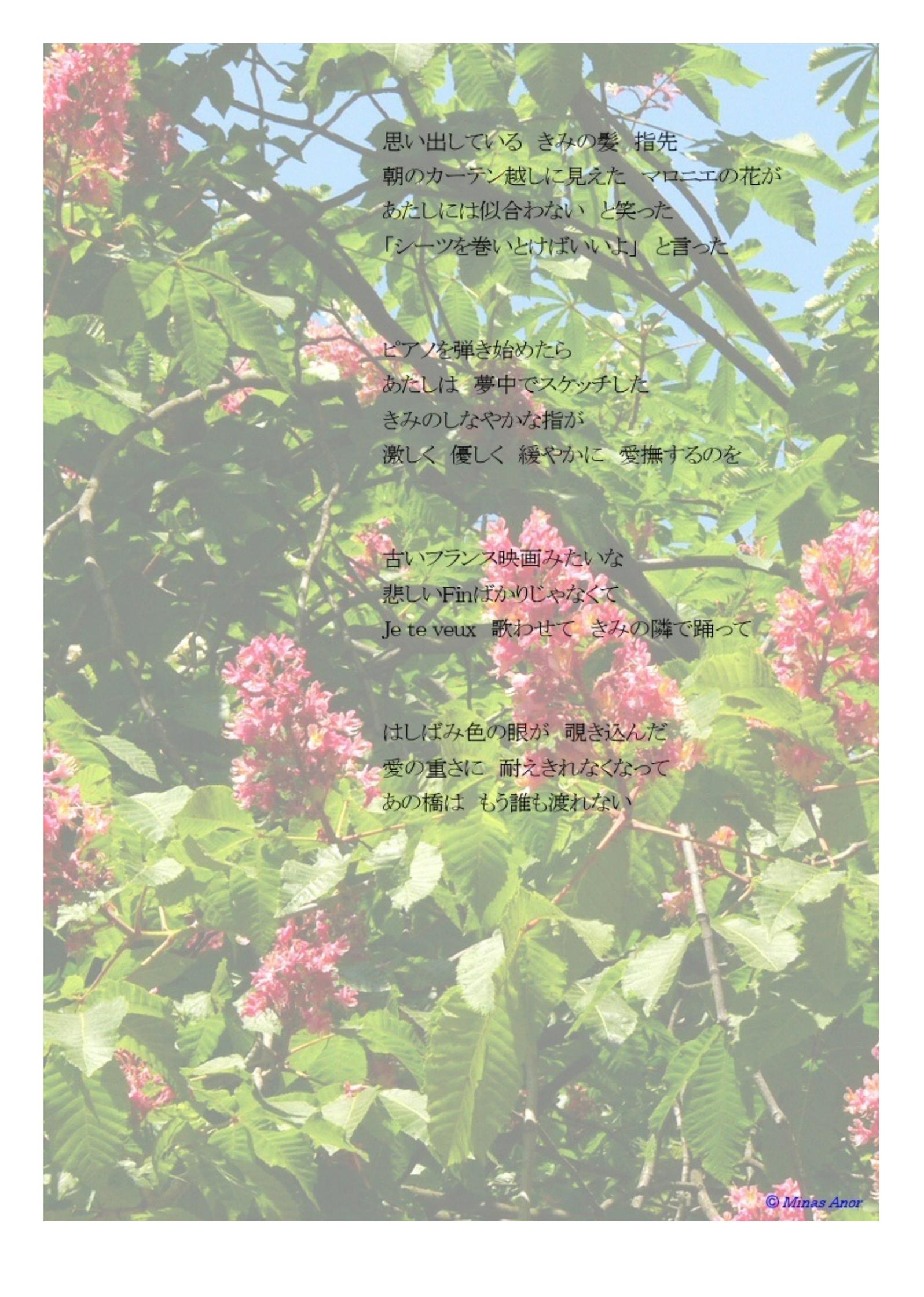
巴里の乾いた雨は  
冷ただけが肌に残る  
ショーウィンドウのマカロンが  
へへっ と笑う

Dans cette maison est mort  
le 8 janvier 1896 le poète  
Paul VERLAINE  
né à Metz le 30 mars 1844  
Hommage des amis de VERLAINE  
29 juin 1919

La maison de Verlaine

CUISINE FRANÇAISE  
TRADITIONNELLE





思い出している きみの髪 指先  
朝のカーテン越しに見えた マロニエの花が  
あたしには似合わない と笑った  
「シーツを巻いとけばいいよ」と言った

ピアノを弾き始めたら  
あたしは 夢中でスケッチした  
きみのしなやかな指が  
激しく 優しく 緩やかに 愛撫するのを

古いフランス映画みたいな  
悲しいFinばかりじゃなくて  
Je te veux 歌わせて きみの隣で踊って

はしばみ色の眼が 覗き込んだ  
愛の重さに 耐えきれなくなって  
あの橋は もう誰も渡れない





移動遊園地のメリーゴーラウンド  
イルミネーションに 子供が歓声をあげる  
いつまでも追いつかない 振り向いた笑顔  
もどかしい楽しさを思い出す

丘の上の石段に座って  
町並みの彼方に カミュの空を見ていた  
明瞭とした影は 石畳を滑るように進んだ  
ふっくらした 未来の場所に向かって

伝えなかった感情は 曖昧に  
ぼやけてしまった影が誤魔化して  
憧れた風景画に 閉じ込められて動かなくなった

ああ 凱旋門が見えるね  
光る観覧車も回っている 高みまで  
失った夢の 続きを見ている



きみの真っ直ぐな眼差しに あたしは  
耐えられなかった 大人のふりをして  
夢みたいなこと言っちゃだめ なんて  
夢を見たかったのは あたしのほうなのに

あたしは臆病だっただけ  
子供から玩具を取り上げた時のような  
気分になるのを怯えていただけ  
あたしなんかより…

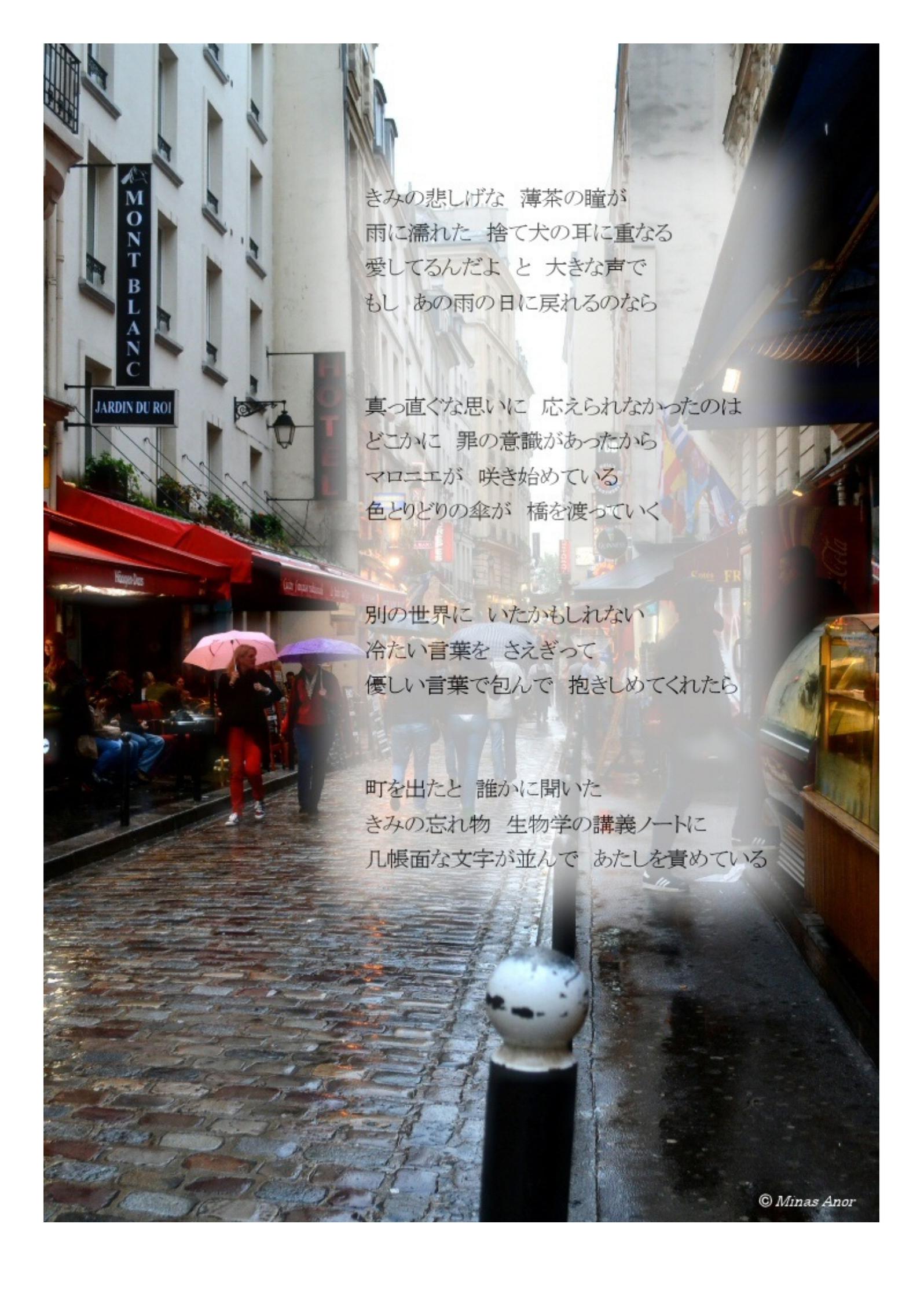
少し幼さの残る きみの広い背中が  
薄紅色の風景に 溶け去っていくのを  
フランス映画のヒロインになって 眺めていた

街は暮れなずむ 青の底に沈んで  
風に乗ってきた 花びらが転がって  
駅のホームで戸惑っている



サヨナラ言えなくて

---



きみの悲しげな 薄茶の瞳が  
雨に濡れた 捨て犬の耳に重なる  
愛してるんだよ と 大きな声で  
もし あの雨の日に戻れるのなら

真っ直ぐな思いに 応えられなかったのは  
どこかに 罪の意識があったから  
マロニエが 咲き始めている  
色とりどりの傘が 橋を渡っていく

別の世界に いたかもしれない  
冷たい言葉を さえぎって  
優しい言葉で包んで 抱きしめてくれたら

町を出たと 誰かに聞いた  
きみの忘れ物 生物学の講義ノートに  
几帳面な文字が並んで あたしを責めている

## パリの憂鬱

<http://p.booklog.jp/book/99386>

著者：藤原 絵理子

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/arwen-eriko/profile>

all photos by Arwen\_Eriko

©Minas Anor

All rights reserved

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/99386>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/99386>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ